

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 井藤 千穂

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 松田 隆美
文学研究科委員、D.Phil.
副査 慶應義塾大学文学部助教授 河内 恵子
副査 ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ・カレッジ
文学部英文学科教授
ロバート・ハン普森 (Robert Hampson) Ph.D.

論文題目 “Towards the Luminous Core : Remapping Cultural Territories in Dorothy Richardson’s *Pilgrimage*”

井藤千穂君による博士号請求論文”Towards the Luminous Core : Remapping Cultural Territories in Dorothy Richardson’s *Pilgrimage*”は、20世紀イギリスの女性作家、ドロシー・リチャードソン (Dorothy Richardson; 1873 - 1957) の自伝的長編小説、『遍歴』(*Pilgrimage*; 全13巻; 1915 - 67)に関する論考である。リチャードソンは、20世紀小説に広く影響を及ぼすこととなった「意識の流れ」の手法を、イギリス小説において初めて用いた作家であるにもかかわらず、本格的研究はいまだに数少なく、20世紀文学研究において等閑視されてきた作家と言ってもよい。井藤論文は、リチャードソンの著作の中では比較的知られている『遍歴』にとどまらず、従来あまり注目されてこなかった短編小説、ノン・フィクションの著作、エッセイ、書評、翻訳書、インタビューなど、彼女の文芸活動を網羅的に追いながら、長期にわたって書き継がれた『遍歴』の全体的構造を読み解くとともに、「意識の流れ」の手法の生成過程と意図を明らかにし、リチャードソンをモダニズム文学史の中に明確に位置付けようとした、意欲的かつ精緻な論文で、その学術的貢献度は極めて高いと言える。

全体は序論と結論を含めて、全7章から構成されている。

Introduction Dislocated Mapper: Desire for Space and its Ownership
Chapter 1 Cosmopolis: Encounter with the Jew and the Start of Spatial Pilgrimage

Chapter 2	Metropolis: In Search of Feminine Space in Science and Socialism
Chapter 3	Physical Space: Creating a New Geography for Gender
Chapter 4	Spiritual Space: Quakerism and the Passage towards the 'Inner Light'
Chapter 5	Text: Textualizing Consciousness as the World-Remapping
Conclusion	Remapping Accomplished? <i>March Moonlight</i> and Beyond
Appendix	Chronology of Dorothy Richardson's Published Works
Bibliography	

論文の概要

序論においては、ドロシー・リチャードソン研究の現状がバランス良く紹介され、さらに『遍歴』という長大な自伝的小説をひとつの流れのもとに解説するための、方法論的キーワードである、「巡礼」(pilgrimage)と「地図の再編成」(remapping)の概念が説明される。論文の章立てからも明らかなように、井藤論文は、著者のドロシー・リチャードソンの分身でもあるヒロイン、ミリアム(Miriam Henderson)の物語を、外的空間から内的空間へと向かうひとつの巡礼の旅としてとらえるが、その旅は、あらかじめ定められた目的地へと向かう伝統的な宗教的巡礼とは異なり、目的地そのものを探究する遍歴的な旅である。そのプロセスを通じてミリアムは、自らが希望を持って深く関わった社会的、精神的、身体的空間を相対化し、それぞれを女性的な視座から眺め直して、その世界の地図を再編成することになる。各章は、広い社会的空間からより狭く内的な個人的空間へと旅をしてゆくミリアムによる地図の再編成を、時間の経過に従って論じている。

ミリアムの旅は、この地球上において、人類が人種や性別の違いを超えて共存できる、理想にもっとも近い場所として、コスモポリスを思い描くところから始まる。第1章の「コスモポリス - ユダヤ人との出会いと空間的遍歴の始まり」では、コスモポリス創造の導き手としてのユダヤ人に対して、ミリアムが当初感じた魅力と、その後の失望が語られる。ミリアムの人生にかかわる3名のユダヤ人男性の登場人物の分析を通じて、彼らのコスモポリタンとしての限界が明らかにされ、コスモポリスは、結局のところ、帝国主義と結びついた男性的な観念であるという主人公の認識が具体的に示される。

第2章の「メトロポリス - 科学と社会主義における女性的空間の探求」においては、19世紀末のロンドンにおける新たな変革のエネルギーとして科学と社会主義とに注目し、そのなかでミリアムが女性的空間を求めて模索する姿が分析される。作品中で特に注目される科学は歯科学(dentistry)であり、当時の歯

科学をめぐる論争をふまえて、いかに歯科学が女性にとって有効な科学技術として認識されるに至ったかが論じられる。また、社会主義は、小説家の H.G. Wells をモデルにしたとされる社会主義者の登場人物、Hypo Wilson の人物造型と、ミリアムとフェビアン協会との出会いというかたちで作品中に登場する。ミリアムは、科学も社会主義も結局のところ男性的基盤に基づいているという結論に帰着するが、本章ではその過程が丁寧に分析されている。

第3章「物理的空間 - 新たな性の地理の創造」においては、ヴィクトリア朝後期の女性の状況の分析をふまえて、主人公が、自分自身の肉体に目を向けて自らの同性愛的傾向を発見することで、ヴィクトリア朝の「女性」という性の枠組から、イデオロギー的にも解き放たれ、自らを両性具有の性へと造りかえていく過程が示される。

第4章「精神的空間 - クエーカー教と『内なる光』への旅」は、第3章とは対照的に精神的空間の発見を扱う。ミリアムの内的空間への旅は、男性が支配的な英国国教会からクエーカー教への教義的シフトと、それに伴う巡礼の意味づけの変化 - 具体的には、ジョン・パニヤンに代表される神を求める霊的巡礼から、例えばジョージ・フォックスのような自己の内面の光へとむかう巡礼への変化 - としてとらえられている。

ミリアムの内的巡礼は、クエーカー教の宗教的な「内なる光」を超えてさらに内面へと降りてゆき、自己の意識の世界へと到達する。結果としてクエーカー教徒の集団からは離反することとなる。第5章「テキスト - 世界地図再編成としての意識のテキスト化」は、そうして行き着いた意識の空間を Laura Marcus の用語を用いて 'speaking silence' 「雄弁な沈黙」として認識することで、読み手から書き手へと変貌を遂げるミリアムを追う。自らの意識の中に宿る記憶を「雄弁な沈黙」としてテキスト化してゆく方法を体得したとき、彼女は男性的視点から、男性のために書かれた従来のテキストから解き放たれる。ミリアムにとってのテキスト空間とは、女性が女性の視点から女性を書くことにより創り出される、女性空間なのである。

以上の各章において分析されたミリアムの空間を求める旅は、政治、科学、宗教、恋愛などの、物理的かつ観念的な空間の遍歴を通じて、ヴィクトリア朝において常識とされてきた社会の枠組を、女性の視点で再検討する旅である。ミリアムの空間開拓は、アダムが物事に名前をつけたことで誕生した男性的原理の世界から「名前をはぎ取って」ゆく行為であり、それは女性による男性世界の地図の再編成であるととらえられる。その達成感はい行された最後の巻、*March Moonlight* において、自分の意識の奥底に降りていったミリアムが、主体と客体が一体化し、自己愛が同時に全ての他者への愛でもあり得る場所、「輝ける核」に出会い、自らが「共有される存在」、言い換えれば「境界線のない女性

的空間」になったという感覚で表現されている。

しかし自己の奥底に存在する「輝ける核」の発見は、果たして巡礼の最終的帰着点となりうるであろうか？結論では、この問題が、ミリアムの分身である作者ドロシー・リチャードソンの立場から検討される。「輝ける核」への帰着は、作者リチャードソンにとっての自らの言語と文体を求める旅に重なるが、それは、言葉は絶対であり真実は言葉によってすべて明らかにされうるという「男性的」論理の対極をなす、いわば「女性的」論理を基盤とするものと理解される。女性的論理とはすなわち、言葉には限界があり、最も重要な真実は沈黙においてのみ伝えられるとする「雄弁な沈黙」であり、言いかえれば、意識と言語とが未分化な混沌に立ち戻って、言葉による細分化を受けていない女性的世界を、あらゆる可能性が渾然一体となって存在する豊穡なる無限の空間として提示する姿勢である。しかし作家としてそのような結論へと突き進むことは、最終的には、自らもまた「完全な沈黙」へと帰結してしまう可能性をはらむ。テキストの旅を続けるためには、その一歩前で踏みとどまり、男性的空間に半身を残して言葉を紡がねばならず、そこに自伝作家としてのリチャードソンのパラドックスがあるとと言える。最終巻となった *March Moonlight* の一見唐突な終わり方は、それが未完のまま残されたことを示しているとも考えられるが、一方、こうしたミリアムとリチャードソン自身のあいだのパラドックスの顕在化としてもとらえられる。リチャードソンの他の作品も参考にして考えるならば、ミリアムの巡礼には終わりがなく、それはテキスト空間を超えて、永続的に続く意識の旅であると理解される。テキストを超えて広がる意識の領域の存在と、そこに見いだされる「雄弁な沈黙」が持つ可能性に対する認識は、いわゆる「意識の流れ」の作家達に共通している。しかし、その「雄弁な沈黙」空間に終始一貫して自らを置き続けたのは、ドロシー・リチャードソンただ一人であった。そしてヴァージニア・ウルフがいみじくも述べたように、そのようなスタンスから生まれた作品を一言で類型化し表現する言葉は見つからず、結果として「意識の流れ」という呼称が生まれることとなったのである。これが本論の結論である。

審査の要旨

以下、2002年10月31日(木)に行った口頭試問の質疑応答をもふまえて、審査委員会の所見を要約する。

井藤論文は、ドロシー・リチャードソンの未刊行のテキストを含む全執筆活動に精通するとともに、リチャードソンおよびイギリスのモダニズム文学全般に関する先行研究を丁寧に読み込んだ上で執筆された、独創性と学術的貢献度の高い論文である。入念に検討された構成のもとで、何よりも作品テキストの

緻密な分析的読みを基盤として、明晰で洗練された議論を展開している。また正確で読みやすい英語で書かれていることも特記に値する。

井藤論文は、『遍歴』全編を、男性原理に支配された文化地図の再編成を伴って進む、女性的空間を探し求める巡礼の旅として読み解いている。本論の基盤を成すこの解釈上の視点は、基本的にクロノロジカルな構造をもったこの自伝的小説全編を読み通す道筋を示すだけでなく、ヒロインが最終的に到達する「雄弁な沈黙」のなかで言葉を紡ぎ出すという手法が、いかに必然的なものであったかを説得的に論じることに成功している。テキストの具体的分析から出発して作家の創作意識と文体の考察に至り、さらにその作家の文学史的位置づけへと発展してゆく正統的な論考は、よどみなく明解な論旨に貫かれている。それは特に、第5章の創作のプロセスを具体的に論じた箇所で、魅力的な分析に結実しており、審査委員全員に感銘を与えた。ミアムは、愛人のアナベルから送られてきた手紙を見て、そこに展開される型破りで視覚的に美しい句読点や空白の利用に対して鮮烈な印象を受ける。井藤論文はその箇所の分析から出発して、いわゆる「意識の流れ」の手法を支える「雄弁な沈黙」がテキストの余白や行間から読み出されてゆくという、女性的な読書の体験を丁寧に跡づけ、このエピソードの文学史的な意義を浮き彫りにするのである。

作品中に描かれた創作活動をめぐる分析は、さらにリチャードソン自身の創作意識の考察へと発展している。『遍歴』の最終巻は、主人公が「輝ける核」に到達するというひとつの結末を示す一方で、一見唐突な終わり方をしている。井藤論文は、その理由は『遍歴』という作品自体が、作者自身の創作活動に鋭く対峙するパラドックスを内包しているからであるという説得力に満ちた解釈を提示して、作品論からモダニズム文学論へと展開してゆく。そしてリチャードソンを、自らを「雄弁な沈黙」のなかに身を置き続けた、永遠に居場所を探し求める地図の再編成者としてとらえて、他の「意識の流れ」の作家との差異を示すことに成功している。この点は、ドロシー・リチャードソンのみならずイギリスのモダニズム文学全体を考えるうえで、極めて重要で斬新な結論であるという点で審査委員の意見は一致している。

『遍歴』において主人公は、そこに巡礼の目的地となりうる可能性を感じて、複数の社会的、精神的空間を移動してゆく。しかし、そうした空間との具体的な接触を通じて、そこに潜む男性支配的な原理に気づき、その空間から最終的に離脱することで、女性的視点から世界の観念地図を再編成するというパターンが繰り返される。井藤論文のもうひとつの特色は、そうした再編成の対象となるヴィクトリア朝後期から20世紀にかけてのさまざまな空間を、同時代の社会的、観念的、文学史的な脈のなかで論じている点にある。こうした文化史的、文学史的アプローチは、この小説を、モダニズム文学の展開史として読む

ことを可能にしている。たとえば、第2章のミリアムと歯科学との関わりへの分析に際しては、リチャードソン自身が1910年代から20年代にかけて歯科学専門誌に寄稿した文章が効果的に利用され、また歯科学の女性にとっての意義をめぐる同時代の論争が入念に調査されている。こうした新資料を用いて、リチャードソンの科学に対する評価の推移を論じた点は積極的に評価されるべきである。

文化史的視点は、第3章、第4章でミリアムのレスビアニズムやクエーカー教への接近と離反を、同時代的文脈で正確にとらえる上でも効果的に機能している。特に第4章では、エマーソンとの類似点が明確に描き出されている。

こうしたアプローチは井藤論文の強みであると同時に、多少の修正および加筆、そして今後のさらなる研究が期待される点でもある。審査委員会の全体として高い評価のなかで、修正点として具体的に指摘された点は、テキストの文化史的、文学史的な文脈をより歴史的に掘り下げてゆく必要性であった。第3章においては、レスビアニズムが18世紀以前には言説化されていなかったような示唆が見られるが、それは不正確な前提である。また、ヒロインが宗教的な探究の過程において出会うルーテル派教会、ローマ・カトリック教会、英国の非国教会派、クエーカー教徒などを論じるに際しては、それぞれの教義的主張を歴史的展開に基づいて比較検討すれば、テキストの解釈はさらに深まったと考えられる。とりわけ、バニヤンの非国教主義の具体的な性格や、ルターの妻のカタリーナが修道女であった事実などについては、その意義を分析することの重要性が指摘された。

井藤論文のキー・コンセプトである巡礼についても、同様な指摘が可能である。近代における巡礼の概念については、Victor Turnerなどを用いて簡潔な定義づけがなされているが、作品中に17世紀のジョン・バニヤンのピューリタンのな寓意的巡礼の記録、*Pilgrim's Progress*がひとつの乗り越えられるべきモデルとして登場している。ミリアムは、ルター派の教会、そしてクエーカー教へと、宗教的な空間を求める遍歴をかさねる。主人公にとっての宗教的到達点が、絶対的で普遍的存在から個人の「内なる光」へとシフトしてゆくプロセスをめぐっても、バニヤン同様に効果的な比較が可能な、他の文学的巡礼のモデルが見いだせるのではないだろうか。中世以来の巡礼記や幻視文学の伝統の理解が、文学史的視点からリチャードソンの「地図再編成としての巡礼」を検証することに役立つと考えられる。特にクエーカー教に関する歴史的研究、近代のフォーク・カトリシズム、キリスト教的な神秘主義についてさらに考察することが有効であるという指摘がなされた。

井藤論文では、リチャードソン自身がヴィクトリア朝を出発点としており、そのフェミニズムも基本的にはヴィクトリア朝の男性支配的原理への反駁とし

てとらえているという指摘がなされている。確かに作品自体の出発点はヴィクトリア朝にあるが、リチャードソンが作家として意識した19世紀以前の文学は、作品中に登場するバニヤンなどに限られないのではないか？たとえば、リチャードソンは「テキストがより多くの読者を獲得すると、それぞれの読者が持っている『輝ける核』が相互に出会い、テキストは無限に広がってゆくこととなる」と明言しているが、こうした主張は、読者の積極的参入ということに対して極めて意識的であったルネサンスの作家と呼応する。特に、『遍歴』中に見られる一体的空間意識の表現及びその比喻には、ジョン・ダンの影響が認められるのではないかという指摘が審査委員よりなされたが、16・17世紀文学の影響の可能性は今後の研究課題となろう。

以上のようないくつかの修正点や今後の課題はあるが、井藤論文は、ドロシー・リチャードソンに関する数少ない本格的な研究であり、全体として国際的水準に達している。単に、『遍歴』について説得力のある解釈を提示したにとどまらず、「意識の流れ」の誕生の必然性を描き出すことでモダニズムの文脈のなかにドロシー・リチャードソンを位置づけることに成功している。現在のドロシー・リチャードソン研究への学術的貢献度も高いので、なるべく早い時期に英語で公刊されることが強く望まれる。また、今後さらに、小説を中心とした20世紀文学の全体像を描いてゆく上で、極めて堅固な出発点となることは間違いないと言える。かくして審査委員会一同は、井藤千穂君の博士号請求論文を、文学博士号を授与されるに相応しい論文であると判断する。